

為替レートはさらに円安に動くのか、それとも円高に戻っていくのか。将来の円レートの動きを予想するのは不可能であるとはいっても、気になる。

為替レートは様々な要因によって動く。日本だけでなく、新興国や米国などの変化にも反応する。だから為替レート予想は難しい。ただ、円レートがいままでのような水準にあるのか確認する方法がないわけではない。実質実効為替レートの動きを見ることだ。

実質実効為替レートとは、様々な通貨に対する円レートの平均に、物価の動きを加味して計算された指標である。この動きで、円

「実質実効」の円レート

が円高になったか円安になったかを判断できる。しかし、ドルレートを見て、現在の円レートの水準はどのあたりにあるのだろうか。実は1985年のはじめの頃の水準とほぼ同じなのだ。当時の円ドルレートは1ドル240円前後だったが、その頃と同じくらいの円安である。超円安と言ってもよいだろう。

実は円安、85年と同水準

多分だろ。しかし、ドルレートを見て、現在の円レートの水準はどのあたりにあるのだろうか。実は1985年のはじめの頃の水準とほぼ同じなのだ。当時の円ドルレートは1ドル240円前後だったが、その頃と同じくらいの円安である。超円安と言ってもよいだろう。

現在の円レートは1ドル100円前後だが、これは調整すると、もろくに、それが85年の240円のところと同じだと言わ

るとすれば、それはおおよそ1ドル57円という計算になる。先日、ある雑誌に円ドルレートは1ドル80円あたりまで円高になるといって、シンクタンクのレポートをのせた記事が載っていた。

この議論は少し荒っぽい。円レートが過去30年で、最終的に1ドル80円というレベルにたどり着くとすれば、毎年2%の10年間の複利で計算して、現在の円ドルレートはおおよそ1ドル97・6円という計算結果になる。

日本が金融の超緩和策をとって、利がさらに上昇すること、あるいは日米金利格差が長期化するようなことがあれば、さらに大幅な円安に動くことになる。米国のテー

元のリポートを読んだ。替レートにどの程度の影響を及ぼしているのかということだ。今、日米間には長期金利

は歴史的にみてあまりにも円安すぎる。かりに過去30年間の平均的な水準まで円レ

めるとすれば、それつ円高・ドル安の方向に為替レートが動く必要がある。これは調整すると、もろくに、それが85年の240円のところと同じだと言わ



伊藤元重の

ニュースな見方

*この記事は日本経済新聞社の許諾を得て転載しています。